侍中群要に山城国宇治の御網代より日毎に鮎魚を進るとなんかけるも、今は此例なくて、弥生の頃は鮎汲とて平等院より十町ばかり川上櫃川のわたしのほとりにて、人々は巖の肩にならび居て、早瀬を登る若鮎を汲上ゲ汲上ゲ輿に乗じき。李白が詩に万戸候も幕すとは此たのしみに換がたきをいふ也。又氷魚をとりて毎年九月より十二月までこれを貢よし、花鳥余情に見えたり。

拾遺

数ならぬ身をうぢ川の網代木におほくのひをも過しつる哉

読人しらず